

2020 年度 ソニー幼児教育支援プログラム

「科学する心を育てる」
～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

《好き》を深める力

—友達との関わりの中で広がる遊びの世界—



NP0 法人東村山子育て支援ネットワークすずめ
つばさ保育園

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

I 本物の大きさの恐竜をつくりたい・・・・・・・・・・ 2

- 事例1 6月1日(月)恐竜作りのはじまり
事例2 6月2日(火)恐竜に色をつけよう
6月3日(水)ティラノサウルス完成！
事例3 6月4日(木)うもうがない！
クラス活動を共有していく

II 恐竜の世界への興味—それぞれの興味の枝分かれ—・・・・ 5

- 事例4 7月6日(月)恐竜ってどんな世界に生きていたんだろう？
保護者と共に一子どもを真ん中に—
事例5 7月6日(月)恐竜の世界を作ってみよう
事例6 7月8日(水)うまく作れない！壊れちゃうー—
自分でなんでも形にできる嬉しさと自信—男児 K—

III みんなの思いが形に—そらぐみ恐竜博物館—・・・・ 9

- 事例7 7月9日(木)自由遊びから始まった博物館ごっこ
事例8 7月9日(木)博物館やりたい！やってみよう！
でも博物館ってどういうところ？
事例9 7月10日(金)学びの深まり—なぜ火山作らないの？
事例10 7月21日(火)恐竜博物館やるよ！
事例11 7月22日(水)そらぐみ恐竜博物館開催！
お父さんお母さんを博物館に招待するよ！
事例12 博物館が終わって・・・

IV 探究心の深まり—映画館作りのはじまり—・・・・ 16

- 事例13 8月5日(水)あれ？これって映画みたい！
事例14 8月6日(木)映画館みたいにできるかな？

V まとめ 実践を通して科学する心とは・・・・ 18

おわりに—今後の課題と取り組み

2020、6月～5歳児

はじめに

本園では、2017 年度から 3 年間、何気ない日常にいくつものきっかけ(科学)が転がっていて、その物事に対して心が動いた時が『科学する心』が育まれている瞬間だと考え、実践を積み重ねてきている。

これまでの実践を振り返ってみると、2017 年度は、子どもたちが自由遊びの中で楽しんでいた海の世界を、ごっこ遊びや『描いたり制作したり』という表現を楽しむことで、興味を広げていく姿が見られ、子どもたちの科学する心を育くむために、興味に気づき、寄り添い、一緒に作ることを通して様々な経験が出来るような環境の大切さが分かった。

2018 年度は、自然との関わりの中で見つけた霜柱。霜柱がどうやって出来るのか？を発見し、【自分達でも霜柱をつくらしてみたい！】思いが生まれ、仲間とともに試行錯誤しながら進めていった。見て、感じた不思議さに関心を持ち、そこから生まれた疑問や気づきを友達と共有していく。科学する面白さは仲間と共に感じられていくのだと学ばされた。

2019 年度は、自由遊びから生まれたロケット作りの興味が、友達、クラス全体の探究に広がり『ロケットを作りたい、飛ばしたい』という目的に向かって活動を繰り返していく過程から、子どもの思いに寄り添いながら、存分に自分達の考えた仮説を立証できる環境を工夫していくこと、失敗も更なる気づきとなり新たな探究心へと繋がっていくことを見出した。

実践を積み重ねていくと、日常生活の中には様々なきっかけがあり、そこからヒト・モノ・コトが関わりあいながら科学する心が育まれていくということがわかってきた。子どもたちがどんなことに興味を持っているのか？やってみたいと思えるきっかけに大人がどう寄り添い、関わっていくか？……

園として、子どもたちの興味に寄り添い、ふとした疑問には「どうしてだろうね？」と一緒に不思議を共感し、すぐに答えを言うのではなく、子どもなりのユニークな発想を大切に立証していく楽しさを積み重ねていく過程を大切にしている。今までの5歳児の実践では、様々な方法(図鑑で調べる・実際に見る・本物に触れる・仮説を実証するなど)で試行錯誤していく過程で、友達同士で対話を深めていったり、知れば知るほど探究心の芽生えが生まれてくる姿が見られた。しかし、実はそれぞれの歳児で子ども達は身の回りにある全てのものに興味を持ち、不思議と感じた時に『科学する心』が育まれていると捉えている。園内研修では写真や子どもの姿をそれぞれ持ち寄り、保育の可視化を進めている。子どもたちの姿をクラスの枠を超えて、語り合い、〈次はこういう環境を設定してみようか？〉〈次にどうなるか見守ってみよう！〉と保育の新たな工夫や見方、配慮を職員間で共有することで、子ども達の【やってみたい】を尊重する関わりが多くみられている。また、昨年立ち上げた研究会では、大人も主体的に楽しもう！学ぼう！をコンセプトに、自分の興味ある分野、得意分野で、モノを作ったり、話し合ったりして仲間達と楽しみ、得意を持ち寄りチーム保育で保育の質の向上を目指している。

今年度は、子どもの《好き》なコトから生まれる創造性や発想を大切に、ヒト・モノ・コトが関わり合って、どう遊びの世界が広がっていくのかに焦点を当てて考察し、実践を深めていく。



I 本物の恐竜をつくりたい

事例1 6月1日(月)

恐竜作りのはじめ

乳児期から恐竜に興味があり、遊びも恐竜の動きを真似たごっこ遊びや、ブロックで恐竜の形を作ることが多い男児5名。遊びの会話も恐竜関連が中心で、自分の知っている知識を担任に話すことも多い。

男児R「ティラノサウルスって大きいんだよ！ビルぐらいあるんだよ。だって15メートルあるんだもん」

保「15メートルってどれぐらい？」

男児R「(手を空に向けて)空ぐらい！」

保「それじゃあ分からないな。この保育園よりも大きいってこと？」

男児K「あたりまえじゃん！」

男児K「こーんなに大きいティラノサウルス！作ってみたい！」

保「作れるかな？」

男児たち「できる！やろう！」

どうやって作るのか？まず、子どもたちの様子を見守ることにした。まず段ボールが欲しいといわれたので、すぐに準備する。担任は集中して取り組めるように、他児が来ない広い廊下で作ることを提案。子どもたちの考えは、ティラノサウルスの長さを段ボールで繋げていくというので、メジャーの使い方と【15メートルは1メートルの15個分】を伝えてみる。1メートルの長さを自分たちのカラダで感覚をつかもうと、腕を伸ばした長さがほぼ1メートルだった。「おー、これが1メートルだ！」とみんなで腕を伸ばしてみる。カラダで長さを知れる経験は面白かったようだ。そして、測りながらメジャーの見方を伝えていくと、自然とメジャーを押さえる子、1メートルを測る子、えんぴつで印をつける子、数を数える子…と役割分担をしながら、自分たちで測り終える。実際に並べると「やっぱりティラノサウルスって大きいんだね」と改めて大きさを感じたようだ。そこから図鑑を見ながら、顔を描き始めた。「もっと大きいよ」「歯って尖ってるよね」「目は小さいよ」など、今までの自分の知識をお互いに話し合いながら、ひとり一人好きなパーツがあるようで、それぞれこだわりながら描いていた。

★環境構成 ○保育者のかかわり

ぼくのうでと
おなじくらい

えー！
やっぱりティラノサウルスっておおきいね！

★保育室に恐竜図鑑を置いていき、いつでも調べられるようになっていく。
★様々な素材で製作を楽しめるように、段ボール、ガムテープ、セロハンテープ、絵の具を置いておく。
○子ども達の気付きを他児にも伝えて、みんなが気持ちを共有できるように心がけた。

考察

日常会話でも《恐竜の大きさ》について関心を持ってよく話していた男児たち。大きいことの理解はしているが、自分を基準にした時、実際にどれだけの大きさは分からないところが、より子どもたちの関心事となっていた。「作りたい」声もあがっていたので、すぐに実行できるように様々な素材は保育室に準備しておいた。実際に作ると「恐竜ってやっぱりすごい！」「大きい！」という圧倒されている印象を受けた。そこからは、より恐竜の細かい部分に焦点を当てて本物に近い恐竜を作ろうと試行錯誤していたので、その過程も丁寧に関わっていく。

このいろいろいいね！

恐竜に色をつけよう！

なんとなく、顔の形が出来上がった所で「ティラノサウルスは緑とか茶色とかいろんな色があるんだよ。」「青と黄色を混ぜてから、黒を足すといいかも」「じゃあ、絵の具で塗ろう！」と男児二人のアイデア。そこで、絵の具を準備すると、自分たちで色を混ぜながら納得する色になるまで繰り返し、色を足していく。それぞれの色のイメージは多少異なるものの、お互いに納得しているので「その色、本物みたいでいいね！」とお互いを認めながらの作業が続く。この頃からクラスの友達も興味を持って、周りで見ていることが増えてきた。



ほんものみたい！

カラダはどうやって作ればいいのか？

顔が出来上がったことで、今度はカラダを作り始めることにした。《15メートルに測った段ボールを全部使えば本物の恐竜と同じ大きさになる！》という考えで、段ボールを組み合わせて体の形を作り、鉛筆で下書きをする。この作業は担任よりも子どもたちの方が恐竜の形に詳しくかったので、殆ど手を出さずに見守り、子どもが下書きの線のはさみで切れない部分だけ担任が切るようにした。色はどの色を混ぜていけばいいか、少しずつ分かってきたようだ。はじめは筆で塗っていたが「手で塗った方が気持ちいい！」と感触遊びの延長で楽しんでいく。絵の具で楽しそうに塗る姿に興味を持った仲間が輪に加わる。塗りながら「恐竜の足ってこんなに大きいのか？」「これじゃあ潰されちゃう！」「本物の恐竜みたい！どうやってこの色作ったの？」と本物さながらの恐竜の迫力に、関心が集まってきた。



あしてて

こんなにおおきいの？

どのいろをまぜたらほんものっぽいかな？

★いろいろな色を試せるように絵の具の色の種類を多めに準備しておき、自分達で色の組合わせの試行錯誤が十分出来るようにする。

★カラダの部分が大きいので、恐竜の製作コーナーを作り、集中して取り組めるようにした。

○思い切り活動が行なえるように制作場所の確保する。(一つ一つのパーツが大きいので)

○恐竜が出来てくる過程を保護者にも写真で伝えて、一緒にワクワクを共有してもらう。

考察

子どもたちのひらめきがただの段ボールから迫力ある恐竜へと形作られていく。途中で体の形を巡って意見がぶつかり合うが、その都度対話を重ね、時に折り合いをつけながら前に進んでいく。『ティラノサウルスを作る！』という思いがひとつだからこそ、お互いの思いも汲み取れるのだと感じ、子ども達から改めて対話の大切さを学んだ。担任として、これがどう恐竜の全体像になるのか想像もつかなかったのでワクワクドキドキしながら子どもたちの力を見守っていた。また、4月より自由遊びのコーナーに絵の具を設定して、子どもたちが自由に遊べるようにしたので、色の微妙な混ざり合いが表現しやすいことが分かっていったようだ。常に、色をつける時は絵の具を使って話し合いが進められていて、大人では考え付かないような色の組み合わせで、見ていて関心するばかりだ。

保育室の一角の製作コーナーで始まったが、少しずつ興味を持った子から輪に加わり数人から始まった恐竜作りがクラスに広まってきた。子ども達の思いはクラスの仲間に波及してくるのだと改めて感じた。

6月3日(水)ティラノサウルス完成！

1週間かけて恐竜が完成。保育室に飾ってみると今にも動き出しそう。自分たちで作り上げた本物に近い大きさの恐竜が完成したところで、定規で測ってみる。「先生100よりもずっと大きい！よっしゃー！ティラノサウルスできた！」

考察

子ども達の思いから始まった恐竜作り。段ボールがどう恐竜になるのか？しかも本物の大きさで？

大人なら、どう作ればいいのか？頭で考えてしまう。でも子ども達は、小さい頃からずっと好きな恐竜の特徴が分かっていたからか、躊躇なく作り進めていた。近くで見守っていた私も驚きの連続だった。自分の興味のあることに突き進む好奇心は、自信にも繋がっていくのだと感じた。一人では難しいことも、仲間と共に協力するからこそ最後までやり遂げることができたのだと思う。ここからどう子ども達が遊びを広げていくか楽しみである。

こんなにおおきいよ！
ぼくたちがつくったんだよ！



「うもうがない!!」

自他ともに認める恐竜好きな男児 R。恐竜に対するこだわりが強く、作る過程で「そんな首は短くない!」「もっと手は小さいの」と友達とぶつかることが多かった。一緒に作りたい気持ちは強いのに自分のこだわりを突き通したい気持ちが上回り、友達との作業が続かず、自分が納得している部分中心の参加だった。担任として少しでも仲間と作り出す楽しさを感じてもらいたいと思い、R が参加している時には子ども同士の会話の輪に加わり、お互いの思いや気づきを肯定的に感じ取れるよう関わりを丁寧にしてきた。

完成して数日経った時に、男児 R が「先生。恐竜ってうもうがあるんだよ。でも、このティラノサウルスはうもうがない!」と言ってきた。【うもう】はどんなものか? R と一緒に図鑑で調べてみると、恐竜は皮膚がツルツルではなく、羽毛が生えている事が分かった。男児 R の気づきをクラスに伝えることで情報が共有し「うもうつけなきゃだね」「でもうもうって何色?」と対話が始まった。そこから新たな展開へと繋がれたらと思い、クラスで映像を見て恐竜について調べてみると、
女児「こうやってみるとけむくじゃらなんだね」
女児「恐竜の鳴き声って怖ーい! 吠えてるみたい」
男児「うおー(鳴き真似)」
女児「赤とか黄色、青の毛!! ティラノサウルスっておしゃれ!」
女児「ほんと。全部茶色だと思ってた」

羽毛をどうやって表現するのか見ていると、R と男児 K が女児が遊びで使っていた羊毛に着目した。理由は、これも羊の毛で恐竜の羽毛に似ているからとのこと。そこで色を選び、その想いをクラスの仲間に伝えると「それいいねー」と共感。早速、数名で羽毛付けが始まった。つけてみると、よりリアルさが出てきて、「本当に動き出しそう!」と女児達から言われ、自分のアイデアを友達が受け入れてくれた喜びを R は感じていたようだ。このことがきっかけとなり、友達の意見にも耳を傾けることが増えてきた。

ティラノサウルスって
こわそー!



《映像》

NHK 恐竜超世界2019
ティラノサウルスはけむくじゃら?

うん!
ようもうでぴったり!



クラスで活動を共有していく

今年度は今までのような賑やかな新年度の始まりではなく、感染症対策にどう対応していけば良いか? を考えつつの保育。その中で始まったティラノサウルス作り。

作られていく過程を「休んでたから知らない」ではなく、作られていた過程を共有してこれからの活動を共に楽しんでもらいたい思いがあった。そこで保育室に写真やコメントをつけたドキュメンテーションを貼り、見て分かるように工夫した。久しぶりに登園した子は、保育室の大きな恐竜に驚くと共に、写真や恐竜を見ながら「こうやって作ったんだ!」と友達同士でお喋りを楽しむ姿が見られた。

また「これはどうやって作ったの?」と気になることを聞いたり、子供達同士でコミュニケーションをとっている姿に、とても微笑ましく、これからどんな遊びが生まれるか? ととても楽しみななった。



Ⅱ 恐竜の世界への興味 ―それぞれの興味の枝分かれ―

事例4 7月6日(月)

恐竜ってどんな世界で生きていたんだろう？

映像を見たことで、より恐竜への関心が出てきている。恐竜の生きていた世界はどんな世界だろうか？恐竜そのものから、もう少し視野を広げていきたいと思い、3歳児から楽しんでた恐竜フィギュアを遊びのコーナーの一つに設定すると、早速それぞれ好きな恐竜で遊び始めた。そして、この箱の中で恐竜の世界が繰り広げられていた。

男児k「ここには何も無いね」

保「えっ？どうゆうこと？」

男児k「恐竜の住んでいるところって草とか木とかあるんだよ」

男児r「そうだよ。そうじゃないと草食恐竜は生きられないんだよ」

保「そうか。この間の映像で草を食べる恐竜もいたもんね。他に生きるために必要なものってあるかな？」

男児k「ある！水も必要！あと肉食恐竜は他の恐竜を食べるんだよ」

男児k「鳥の恐竜もいるし、水の中に住んでいる恐竜もいるよね」

男児R「今は恐竜じゃなくて魚とかシャークとか！」

男児R「今度、恐竜の世界作ろうよ。ティラノサウルスだけじゃないもん。恐竜いっぱいいるし！」

女児「わたしも作りたい！」

保「じゃあ、作ってみる？どんなものなら作れるかな？」

女児H「これ(恐竜フィギュア)と同じように作りたいなー」

保「同じようにつる形？」

女児H「そう。本物みたいに。」

女児K「粘土ならできるんじゃない？前にRくん粘土で恐竜作ってたもん」

保「いいアイデア！粘土よりもよく固まる紙粘土でやってみよう！」

★恐竜だけではなく、恐竜が生きていた時代にも関心を持てるようにフィギュアを準備し、遊びコーナーの一つに設定する。

○恐竜の図鑑を見ながらどんな世界だったのか？

今の自分たちの世界と比べながら話をしていく。



考察

ここまで、子ども達の気付きやアイデアを大切に関わってきたが、今回、自分の中のイメージで子ども達が考える前にフィギュアのように作れて色も塗れる！と先走り《紙粘土》の素材を提案してしまった。この時、更に恐竜の活動が更に発展させていけるのでは！との思いが強すぎたと思う。

今の子どもたちなら、様々な素材で作製する過程で、どんな素材なら適切か？試行錯誤することの面白さにも目覚めていて、そこから新たな展開になるかもしれないのに、その可能性を自ら潰してしまった。大失敗。改めて、保育者の声かけのタイミングと関わり方の大切さを痛感した。ただ、自分から提案した紙粘土の素材に今まであまり興味のなかった女児達が、興味を持ち、作る意欲が高まっていたのでそのまま進めていく。そこから、作り出していく過程を大切にしていこうことにした。

保護者と共に一子どもを真ん中に一

女児が朝から驚いた声で「千葉に隕石が落ちちたって！」と報告してきた。私も、ニュースで見えていて驚いたので、同じ気持ちで興奮しながら一緒に話をしていたら、知らなかった子達も「どういう事？」と興味を示してきた。そこでニュースに出てきた隕石の写真を見せると、「この隕石の落ちたマンションの人は大丈夫？」「落ちる音はどれぐらいだったのかな？」「人に打つからなくて良かった」「僕もお母さんと一緒にニュース見たよ」といろんな感想があった。ちょうど、恐竜のことを調べていて恐竜の時代にもあった出来事が、今の自分達が生きている時代にも同じことが起こる不思議さを感じていたようだ。家庭でも、「子どもが隕石のニュースに興味を持って見ていたけど、恐竜のことを調べていたから身近に感じたんですね」と話され、私たち大人も、一見そこまで気にしないような出来事も子ども達の興味の世界に入り込んで楽しんでいるんだなと気付かされた。

恐竜の世界を作ってみよう

この頃から興味のある男児だけではなく女児達も、興味のあるものは積極的に遊びに加わりアイデアを出すようになってきた。紙粘土を準備すると男児は自分のお気に入りの恐竜を作るが、女児は好きな恐竜にこだわることなく、見た目や色に注目して選ぶ。そして、足の形、顔の部分まで細かく観察して形にしていくなかで、「どうしてここに角があるんだろう?」「このしっぽの先はボールみたいだね」「この背中についてるボツボツみたいなやつて敵から自分を守るため?」など、今までは関心のなかった恐竜の生態や特徴を実際に作ることで意識し、気になった部分は男児に質問しながら作ることを楽しんでいた。

★対話をしながら作れるように、丸テーブルにして、何人かで作業できるようにした。

★恐竜フィギュアコーナーと製作コーナーを近くにして、興味のある恐竜がすぐに見られるようにした。

○保育者も一緒に作ることで、恐竜の特徴や、作り出す面白さと難しさを子ども達と共有した。

恐竜の形って?自分の指で作り出される面白さと難しさ



このボツボツが
むずかしい!



もうすこし
しっぽをながくしよう!



たくさんのきょうりゅうができたよ!

このきょうりゅうのくびは
ながくてむずかしいー



ほんものと
おなじいろでぬろう!



このいろ
じぶんでつくったんだよ

作りたい色を自分の感性で生み出す楽しさ

考察

絵で描くことと形を作り出すことの違いに戸惑いながらも、試行錯誤を繰り返しながら形を作っていく。思うようにいかないからこそ、指先を駆使していくことで少しずつコツを得て、イメージ通りに形が出来ていく楽しさを感じていた。また、担任も一緒に作ることで、子ども達と同じ目線で会話を楽しみながら、改めて子ども達の指先の表現の滑らかさに気付く事が出来た。



このいろとこのいろ
まぜたらどうなるかな?

うまく作れない！壊れちゃうー

女兒「せんせーい！大変！尻尾がとれちゃったー」

女兒「こっちは首が折れちゃったー」

作る過程ではうまくっついていてたが、時間が経ち乾くと、細い部分が取れやすくなっていた。ポロポロ取れるものもある。子ども達は自分の持っている糊でつけてみた。

女兒「ダメ。ぜんぜんくっつかない」

保「確かに。紙は糊でつくのにね」

女兒「これ、紙じゃないからかー」

保「他に何なら付くかな？」

女兒「セロハンテープでやってみる」

やってみるが、見た目に納得できない。そこで教材スペースに行き、どれならいいかを自分達で確認する。すると、以前木工で使ったボンドがあるのに気づき、着目する。

女兒「これならいけるかも」

保「おっ！前に使ったボンドね！」

女兒「これならくっつくよ」

そこで、保育者がある程度くっつけられる部分はボンドでつけて様子を見ると、なんとか体の部分はついた。しかし、小さく崩れたものもまだある。どうしていくか？子ども達の様子を見ていくことにする。

次の日

女兒 h「この取れちゃってるのも絵の具で色つけていい？」

保「どうぞ！でも、取れちゃったね。どうしようか？」

女兒 h「うーん」

女兒 k「(手で持ちながらずっと眺めて)これ、恐竜の頭みたい」

女兒 h「ほんとだ！じゃあ、これは足の骨」

女兒 y「おっ！これはしっぽにできるじゃん」

女兒 r「ねー。先生！これ、恐竜の骨の化石にできるよ」

保「それ、ナイスアイデア！」

女兒 k「先生、博物館行ったことある？こういう骨の化石あるんだよ」

女兒 m「(図鑑を持ってきて)ここにも載ってるよ！」

保「先生も博物館で見たことあるよ！」

女兒 k「あるよね！この小さいのも骨にして化石作ろうよ！」

女兒 h「うん！取れて残念だけど、その分骨の化石にしよう！」

女兒 k「でも、うちら恐竜描けないよ」

男児 h「Kくんに描いてもらおう！上手だから」

すぐにKくんを呼んで、恐竜を描いてもらう。その化石をどうつけるか？子ども達の意見を待っていると、自分達でボンドを持ってきたので担任が紙につけて、その上から紙粘土を置いて化石を作っていた。

○取れてしまった紙粘土をどうしたらいいか？子ども達と共に考える。失敗も次に繋がると思え、敢えて気づきをひとつひとつ経験させていく。



考察

男児は大きくダイナミックに作ったので壊れることが殆どなかったが、女兒は細かく丁寧に作り込んだことで、小さなパーツが取れやすくなっていた。作ることが面白く何体もの恐竜を作り、色付けを楽しみにしていたら壊れていた。そんな状況にガッカリしておしまいにするのではなく、そこから、くっつけるためにはどうしたらいいか？を、これまでの経験から考え、答えを導き出す。そのくっつくかな？どうか？の過程も楽しんでた女兒達。自分達の仮説を実証する面白さに目覚めていた。そして、恐竜に関心を持ってきたからこそ生まれた新たな気づき。子ども達にとっては、取れてしまった予想外の展開が、新たな遊びの始まりとなった。恐竜作りから、骨の化石作りに更なる遊びが広がっていく流れは、一人一人の興味を持つ分野が違っていて、そのことに丁寧に寄り添うことが、より遊びの幅を広げていると感じている。クラスみんなが同じことを一斉に行うのではなく、それぞれのペースでそれぞれの関心を深く掘り下げることができるように関わっていくことを大切にしていきたいと思った。

自分でなんでも形にできる嬉しさと自信—男児 K—

小さな頃から恐竜が好きで、最初のティラノサウルス作りから張り切っていた男児 K。ただ様々な分野で自信がなく、新しいことに挑戦するのが苦手で、遊びの広がりが少なかった。「恐竜が描きたいけどうまく書けないからやだ」「ハサミ苦手」と、自ら壁を作ってしまう。担任として、『やってみたいからやってみよう！』と苦手よりも好きな気持ちで前向きになればいいなどの思いがあった。だからこそ「ティラノサウルスを作りたい！」と言った時にこのことが本児の自信が持てるきっかけになればいいなと思っていた。そして友達と協力しながら作りあげたこと、Kにとっては達成感と共に、自分でも出来るのかな？と一歩前に進むきっかけとなった。

その後の自由遊びでは頻繁に「一緒に描こう」と自分から自由画帳を出して、クレパスで恐竜や動物を描く姿が見られてきた。

K「このトカゲは本当は大きいトカゲ」

保「そうなんだ。色が綺麗で素敵なトカゲだね」

K「そう！これおうちに持って帰ってお母さんに見せよう」

保「お母さん、喜ぶね」

K が描く絵は、とても色合いが素敵でそれでいてダイナミック。本物っぽく描くことにこだわりのあったが、色合いを意識させたことが、本児にとっては意外だった様子。そこから、必ず描いた絵は色彩豊かに彩られて見せに来るようになった。みんなにも見てもらおうとクラスの額縁に入れて飾るようにしたら、そのことがとても嬉しかったようだ。自宅でも保護者から「モノ作りに夢中で作品がいっぱいになってきました！」と報告があった。

更にハサミを使って自由に恐竜を作る制作にも興味を持った。最初のうちは平面で作っていたのが少しずつ立体に作る面白さへと変化していく。【上手、下手ではなく、好きだから作る！】【やってみたいからやる！】その意欲の高まりがKの自信へと繋がっていき、自分からアイデアや意見を発信することも増えてきた。

うまくきょうりゅう
かけないなー



★十分素材と対話できるよう、様々な素材を準備する。その中でイメージを形にするのに、どんなものが適しているか？試行錯誤できるようにした。

★はじめの頃は、隣に担任を座らせて確認しながら取り組むことが多かったが、少しずつ自分でじっくり取り組む姿も見られてきたので、様子を見ながら一人で集中して取り組めるように場所を作った。そのうち、友達同士で楽しく作るが増えてきたので、十分に作れるようにコーナーを広げた。

考察

やりたい気持ちはあるのに、出来ない苦手意識がKを一歩踏み出せない原因となっていた。でも友達と一緒に試行錯誤しながら作った恐竜作りは、本児の中でターニングポイントとなった。『自分でもできるかも！』の思いが遊びの内容をガラリと変えた。様々な素材を組み合わせたり、制作も平面から立体に進化させたり、頭の中のイメージを実際に形にすることの面白さに目覚めていた。そして、「こうしたらどうか？」と作る過程が面白くてたまらない様子。自己表現できることは、こんなにも遊びを豊かにするのだと改めて学ばされた。それと同時に保育者の役割の重要性を感じ、一人一人の育ちに添った環境構成や援助の大切さを再確認した。

おはなししてるの！



うまくたつかなー？
ちょっとおさえてて！



Ⅲ みんなの思いが一つに ―そらぐみ恐竜博物館―

事例7 7月9日(木)

自由遊びから始まった博物館ごっこ

保育室のコーナーを利用して、男児二人が自分達で作った恐竜や飼育している甲虫の幼虫、図鑑を集めて博物館を作っていた。そこに、興味を示した女児達数名が加わり、今の自分達の生活を混ぜ込みながらごっこ遊びが展開されていく。



ようこそ！はくぶつかんへ。
まずはしょうどくしてください！



なかでなにかが
うごいてますよ！

ほんとだ！
どうぶつか？

ワニは
かわにすんでるんだよね？



男児「先生もお客さんで博物館入る？」
保「うん！入りたいなー。入るのに何か必要ですか？」
女児「チケットがないと入れないですよ」
保「あー。チケットないなー。どこに行けばいいですか？」
女児「こっちが受付なので、こちらで買ってください！」
男児「入る前にコロナがあるので、消毒してくださいね」
保「分かりました！」
保「すごい！いろんなものがあるって本当に博物館みたいだ！」
男児「でも、ここだけじゃ狭いの」
男児「そらぐみ全部で博物館やりたいよ」
女児「それいいね。」
保「じゃあ、みんなで話し合ってみる？」
女児「そうしよう！」
女児「なんかワクワクする！」

○男児二人が、ごっこ遊びを始めたので、どのように発展していくか、写真を取りながら記録していく。

○お客さんで遊びに加わった時に、博物館はどういうところか？イメージを持てるような関わりを意識した。

考察

遊びのきっかけは男児二人が作った制作や図鑑などを準備して見やすく配置して始まった博物館ごっこ。中身は実際に自分達で行って経験したこと、見たものが再現されていた。そこに加わった女児達が、よりごっこ遊びとして展開させていく。お互いが、アイデアを出し合いながら、説明をする人、受付の人と役割分担して楽しんでいた。他児が気になり、お客さんとして見に来ることで、よりもっと本物に近い博物館をやりたい思いが強くなったのだと思う。数名の自由遊びから始まった遊びが、また新たな形で発展していくことが5歳児ならではの。今の子どもたちなら、仲間と協力し合いながら、一つの目標に向かってやり遂げられると思い、クラスの話合いを提案した。

博物館やりたい！やってみよう！でも、博物館ってどういうところ？

サークルタイムで、午前中の遊びで男児たちと一緒に博物館ごっこを楽しんでいた女児が「みんなで博物館やりたいんだけど」と切り出すと、すでに自由遊びで楽しんでいたの、すぐに「やろう！」と前向きな意見が多くなっていた。実際に博物館に行ったことがある子は、なんとなくイメージができていたが、良く分からない子もいた。そこで、博物館ってどんなところか？みんなで話し合うことにした。

恐竜がたくさん
いるところ

恐竜の説明して
くれる人がいる

動く恐竜も
いるんだよ

恐竜の世界
が分かる！

恐竜の映画が
見られる！

食べるところがある！

博物館って何がある？どんなところ？

チケットがないと入れない

骨の化石がある！

お土産屋さんも
あるよね



男児「俺たちのティラノサウルスは動かないけど、博物館にちょうどいい！」

女児「あれはみんな驚くよね」

女児「お客さんは怖がるかも」

男児「紙粘土の恐竜も飾れば、恐竜の世界になる！」

男児「でも、火山がない」

女児「ポップコーン屋さんとかあったら楽しいし、やりたい」

女児「休憩するところもあるよ。そこにジュースやさんやりたい」

保「たくさんアイデアが出てきたね」

女児「こないだ作った骨の化石も置こう！」

女児「明日から準備が忙しいね」

※ サークルタイム ※

1 日に 1 回クラスみんなで
集まり、その日のあそびで気
付いたことや、みんなで話し
合いたいことを共有していく
時間

考察

様々な遊びや自分達の経験を積み重ねる中で、友達と共通の目的を見出し、そこに向かってアイデアを出し合ったり、工夫したり、活動が継続的に進められていく。この博物館ごっこもこちらが意図したわけではなく、子どもの興味、関心から生まれた遊び。その遊びに興味を持った子が次々に加わったことで遊びが発展していく。サークルタイム（午睡前と夕方にそれぞれの遊びでみんなに話したい事やクラスで共有したいことを話す時間）で女児が「博物館やりたい！」と切り出したことで、新たな気づきが生まれ、遊びが広がっていった。

博物館といってもそれぞれのイメージがあるが、サークルタイムで話題にすることでクラス全体でイメージ共有ができた。この話し合いで、男児は恐竜に特化した展示に焦点を当て、女児はお店屋さんなどのごっこ遊びの要素が強いこともそれぞれの好きな分野が発揮できそうな予感がして、とても楽しみである。この博物館ごっこを進めていく中で、友達同士で、考えたり、工夫したりしながら、作り出す過程を大切にしていこうと考えた。

また今までの活動を『今日の保育』（毎日の保育の様子を絵や写真を使って保護者にお伝えしている）で発信していたことで、家庭でも恐竜の話や博物館の話が出てきているとの声が聞かれ、子ども達がいそいそと話す姿に、保護者も一緒になってワクワクしていることが嬉しく、共に子どもの育ちに寄り添っていただきたく、話題にすることも継続していくことにした。

学びの深まりーなぜ？火山作らないの？ー

園でも自宅でも、恐竜で遊んだり制作を楽しんでいる男児Y。博物館ごっこを進めていく中で、「恐竜の世界にどうしても火山を作りたい！」と言ってきた。ここは子ども達がどう学びを深めていくか？良い機会だと考え、共に恐竜図鑑で調べることにした。

図鑑を見ると、隕石がぶつかって滅亡と書いてあるものもあったが、男児Yが「自宅にある本で読んだら火山が噴火したからって書いてあったよ。」と言って絵で説明し始めた。

かざんがふんかしたりいんせきがおちてきょうりゅうは
ほろんだんだよ。かざんってやまのうへはあかなの。
かざんがふんかしたときのあか！ひだよ！そのしたはみず。すごく
つめたいの。じめんのしたってうみだったんだよ。したからちから
がうえにうごくの！まくまだよ！



男児Yの説明を受け、火山噴火の可能性もあることも知り実際に作ってみることにした。Yにとっては自分の知識をみんなに伝え、認められる嬉しさ。本児にとっては更なる意欲と自信に繋がったに違いない。実際に噴火させた！意見が多かったので、上の部分は穴を空けることにした。

やまの形はどうなってるかな？

火山は子ども達のアイデアにより恐竜と同じように紙粘土で作ることにした。山の形や表面の状態をどうするか？から、噴火のことも意識しながら作り進めていく。色づけもただの山の色ではなくて、噴火した場合のことも考えていた。そして、作っている段階から「本当に噴火させてみたい！」と声があがり、子ども達と一緒に実験してみることにした。

噴火の様子はクラスみんなで見たいと考え、サークルタイムで行うことにした。

実験の内容は安全な材料で出来るようにこちらで調べて、重曹とお酢を作って噴火するかを確かめてみることにした。子ども達にとって、図鑑や映像でしか見たことない噴火が、目の前でどのようになるのか？ワクワクの好奇心とドキドキの緊張の表情。より噴火のイメージに近づけるように食紅の赤を混ぜて行なうと、思った以上に噴火口からじゅわじゅわ〜と噴火して歓声があがった。

「こうやって火山が噴火したんだね」「富士山もこうだったのかな？」など、本物ではないが、実際に見たからこそ感じる想いが言葉で次々と表れていた。



ここからほんとうに
ふんかさせたいね！

やまはふじさんみたいで、
ゴツゴツしてるんだよ。

火山はどんな色だろう？



ここからかざんがふんかするからちやいろ
とあかをまぜよう！

どうやって噴火するのかな？



じゅわじゅわって
いってるー！



恐竜博物館をやるよ！

サークルタイムで恐竜博物館の話をしてからそれぞれにやりたいことが出てきたので、役割分担をして進めていくことにした。これまでの子ども達の姿から、ある程度大人が入らなくても自分達で話し合いながら進めていこうと信じていたので、必要な部分だけ手伝うようにした。

お店屋さん

《ポップコーン屋さん》

ポップコーンを入れる箱から、ポップコーンをどんな素材」で作るか？本物っぽくしたいとリアルさを追求しながら作り続ける！紙、お花紙・・・いろいろ作ってみた結果、ティッシュが本物に近いとなり、ティッシュで作ることに決まった。



ポップコーンがみえるようにつくりたいの！



お店屋さん

《ジュース屋さん》

大人ではなかなか考えられない映えるジュースを作る！と子ども達のアイデア満載のジュースが次々と出来上がる！

タピオカいりのジュースだよ！



《恐竜の説明係》

博物館に行ったことがある子が多いからこそ、自分達が感じた雰囲気を再現しようとする。



さわったらこわれちゃうからかんばんつくろう～



《受付》

子どもながらに今の状況を自然と遊びに取り入れながら自分達が考える受付を楽しんで設定していく。

いりぐちはきれいにしなきゃね！！



ソーシャルディスタンスはだいじだよ

考察

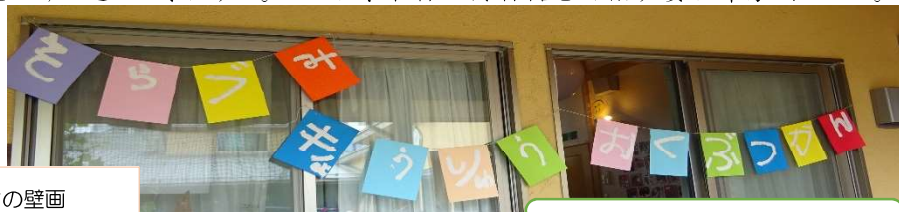
それぞれのコーナーで、今まで自分が経験したことが活かされ、好きな分野、得意な分野で自分の力を存分に発揮し、みんなで作り出す博物館はとても居心地の良い空間になっていった。それは、クラスみんなで楽しんで作り上げていたからだと思う。やりたい！ことをやる主体性を尊重することが、こんなにも遊びを豊かにするのだ！ある程度準備ができたところで、博物館の日程を決めて、他クラスを招待することにした。そして、この取り組みの過程を今日の保育でお知らせしたり、子ども達も自宅で話していて、保護者の方も楽しみにしている声を聞き、この子ども達の姿をぜひ観てもらいたいと思い、お迎えの時に親子で博物館にきてもらうように設定した。

そらぐみ恐竜博物館へようこそ！

博物館当日は、朝から早く準備したくてたまらない様子。

まず、それぞれのコーナーの準備を自分達で行っていく。もうここまでくると、本当に大人の手を必要とせず、お互いに連携を取りながら進めていく。

男児数名から「博物館は暗いからカーテンを閉めよう！」との提案があり、みんなに相談してみると賛成！更に、「電気もちいさいのなんだよ」「うん。結構暗いんだよね」と、子ども達の博物館のイメージがあるようだ。そこで、小さいスポットライトをつけて進める事にする。とことん、本物の博物館を目指す姿が印象的だった。



子ども達デザインの壁画
恐竜を作った感想を添えて！



自分たちで考えた恐竜クイズ！
隣は恐竜間違い探し！！

ようこそ！しょうどくどうぞ！



ドキドキする～！



おきやくさんが
きたよ！



こわれやすいのでさわらない
でみてくださいね！



恐竜ジオラマー恐竜の世界ー



ふんかしてるー！

みんなで、火山噴火の実験をやってみたよ！迫力ある噴火に
大興奮！！



きてくれてありがとう！



どのジュースがいいですか？タピオカいりもありますよ！



説明係りは、お客さんの質問に
答えます！！

お父さん、お母さんを博物館に招待するよ！

夕方は、お迎え時に保護者と共に博物館へ。今度は全ての係を一人で行う事にする。どうかな？と思いながら見ていると、午前中の友達の様子を良く見ていたのが分かるくらい、嬉しそうに、でも張り切って一つ一つ説明する姿が見られた。



考察

男児数人のティラノサウルス作りから始まった恐竜プロジェクト。子ども達の好きな思いが深まっていく過程で、恐竜を通じて様々な興味が広がりクラス全体の活動へと繋がっていき、『そらぐみ恐竜博物館』の開催へとなった。男児の恐竜が好きな気持ちをクラスみんなが理解していて、作っていく姿が生き生きとしていたから、「私もやってみたい！」「面白そうだからやってみたい！」と輪に加わり、更に新たな視点で遊びが広がっていった。これは、クラスの仲間が関わり合ってお互いの思いやアイデアを出し合い、工夫したり、力を合わせたりしてきたからこそ。そして、その先の自分達の目的に向けて取り組んできたものを『そらぐみ恐竜博物館』で、沢山の人の見てもらい、共感してもらい、達成感を感じていた。

また、夕方の部では、子ども達が目を輝かせて、自分の作ったものや、友達と一緒に取り組んだことを話しているのを保護者は間近で見て、子ども達の成長を感じ、そのことを嬉しく感じてもらえたことも、より「自分達はやったぞ！」と達成感を感じることができたのではないかなと思った。

子ども達がとにかくにこやかな表情だったのが担任としてとても嬉しかったし、私自身も、子ども達の思いに寄り添ってきて良かったんだと確信した一日となった。



はくぶつかんのきょうりゅう
すごくおおきかったよ！

保護者と共に一子どもの真ん中に一

博物館で出来事が家庭で良く話されていることを聞き、感想を書いてもらう。

その感想を園のエントランスに置き、クラス以外の職員や保護者に見てもらう事にした。

また、本来なら、実際に博物館に行き、じぶんの目で肌で感じたら、また見方も変わるのでは！と思うが、なかなか戸外に出られず残念。でも、家庭で博物館の映像を見たり、家族で博物館に行ってみたり、一緒に恐竜作りを楽しんだり、家庭でも楽しんでもらっている姿がとても嬉しい。



博物館が終わって・・・

そろぐみ恐竜博物館が終わり、ひとつの目標が達成し、そのあと子ども達の遊びはどう進んでいくのか？考えながらも、今までの自分達のあゆみが目で見てわかるように火山や少しの作品を飾ったり、ドキュメンテーションを見えるところに貼って置く。

自由遊びでは、自分達のやりたい事が明確化してきて、やりたいことをじっくり取り組もうとする姿がクラス全体で見られるようになってきた。

★ひとつひとつのコーナーを区切り、集中できるような環境づくりを目指した。

廃材を使って組み立てる面白さ！

割り箸を使ってお家づくりが始まる。どうやって壁を立たせるか？で悪戦苦闘！友達同士でボンドやガムテープを駆使してなんとか立たせようとする。完成したら、そこはなんと恐竜達のお家だった！「恐竜達もお家があったほうが休めるでしょ！」との優しさ！！



もっと知りたい！
自分達が経験したからこそ、より博物館について気になる！
図書館で絵本を借りてみてみよう！

素材の特徴を活かす！

よりリアルさを追求しながら立体にこだわって作る！



素材の特徴を活かす！
割り箸を骨に見立てて、岩の中にある恐竜の骨を再現中！
「本当に掘ってみたいなー」

絵具で表現を楽しむ！

自分の好きなように表現することが面白くてたまらない！「骨の化石を描いてるよ！」



観察力！！

図鑑を見ながら、気になった動物や恐竜を細かい部分まで見て描くことが面白い。描き終わるまではひとりで集中！



考察

博物館を終えた子ども達は、よりモノを作ることに楽しさを感じた様子。様々な素材から自分の作りたいものの特徴を掴み、そこからイメージを形づけていく、子ども達の生み出す作品は、これまでの活動を経て感じたものや新たな関心ある分野であることが特徴。これは実体験したからこそ、感じるものであると思う。頭ではわかっていながらも「すごい！こうやって遊びが深まっていくんだ！」と子ども達が教えてくれる。
ここから、どう遊びが広がっていくのか？とても楽しみである。

IV 探究心の深まりー映画館作りのはじまりー

事例 13 8月5日(水)

あれ？これって映画みたい！

制作をしようとその廃材を使おうかと色々な箱を見ていた女兒 A。たまたま手にとったお菓子の箱にお花紙が付いていた。

このかみ、ティッシュみたいにうすい

あれ？すける？

おっ！みえる！みえる！



たまたま反対側から覗いていた友だちの指が透けて見えた！

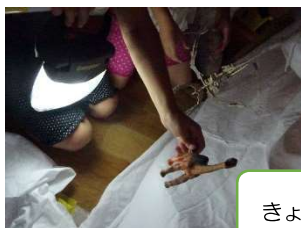
せんせい！かいちゅうでんとうかして！

懐中電灯を使って自分達の手できつねや犬を表現してみたら！映った！

これで、えいがかんできるんじゃない！

えいがかんはおおきいところでみんなでみるから..

せんせい！いいことおもいついた！おおきいぬのない？



きょうりゅうがみえるかやってみるよ！



くらいところでやってみよう！

みえた！みえた！



せいこう！だいせいこう！



これで、こんどはえいがかんできるよ！

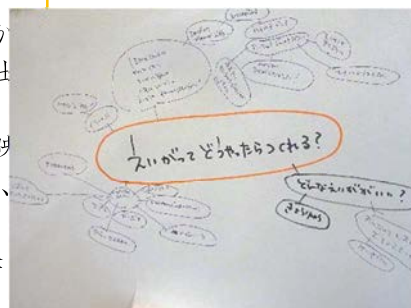
★博物館での制作を通じて、よりモノ作りを楽しむ姿が出てきたので、廃材や素材を多めに制作コーナーに準備している。

★新たな活動が始まったので、子ども達の気づきに寄り添い、一緒に取り組みを楽しんでいく。

考察

たまたま廃材の中にあつた箱がきっかけで思い出した【映画館作り】。博物館でやりたかったことを思い出したのと、自分達がいろんな発見をし「これなら出来るかも」のアイデアを出し合い、実際にやってみる面白さ！博物館を経験し、より作りだすことに目覚めている！！今は影を作りだすことで浮かび上がる映像に不思議さと面白さを感じている。ここからどう映画に広がっていくか？一緒に楽しんでいく事にした。だいたい字も読める子も増えてきたので、ウェブを常に見えるところに貼り、それぞれの気付きをその都度書きとめていくことにした。

ただ、映画を作るといっても、昔の映写機の内容は知らないなので、今の子どもたちの経験や気付きを大切に関わっていくことにした。



映画館みたいに出来るかな？

実験1

白布で光を当てると物が浮かびあがる事を知った子どもたちで、映画館のように舞台とお客さんに分かれるようにしたいと言い、まずは枠を作ることに。



失敗！

★子ども達の気付きを写真で撮りながら、どう進めていくか？様子をみていく。
○思わず「こうしてみれば！」とヒントを言いそうになるのをぐっと我慢する。

枠を段ボールで作真ん中に懐中電灯をつけてみて、白布を張ってみたら懐中電灯の重みで段ボールが崩れて壊れてしまう。スムーズに完成すると思っていたので、一瞬落ち込む子ども達。

実験2

懐中電灯の重みが壊れた原因だと考え、すぐに撤去！枠をもう一度段ボールとガムテープで補強して、後ろから懐中電灯を設置することにした。



成功——！！

映す人と映っているか？自分達で役割分担を決めて進めていく。「もっと暗いほうがいい！」と上にも布をかけてみる。思った以上に暗くなり、恐竜フィギュアを照らしてみると「おっ！見える！見える！」と大喜び！
他にもどんなものが映るか？様々なもので映そうとする。

実験3

形が浮かびあがったので、今度は色が出るか？に注目が集まる。火山噴火の色セロファンの赤がでたので、廃材にあったプラバンで作ってみる！



あれ？かざんのあかがみえるよ！

おっ！ほんとうのえいがみたい！

考察

子ども達の【映画館】のイメージを作る為に、今、保育室内にあるもので実現させていくか？様々な材料を持ち込んで「これでいい！」と満足いくまで繰り返し試したり、工夫していく。この「映画館を作る！」熱量をパワーにして、友達同士で協力しながら実現させていく姿に思考力も芽生えてきている！と嬉しくなる。

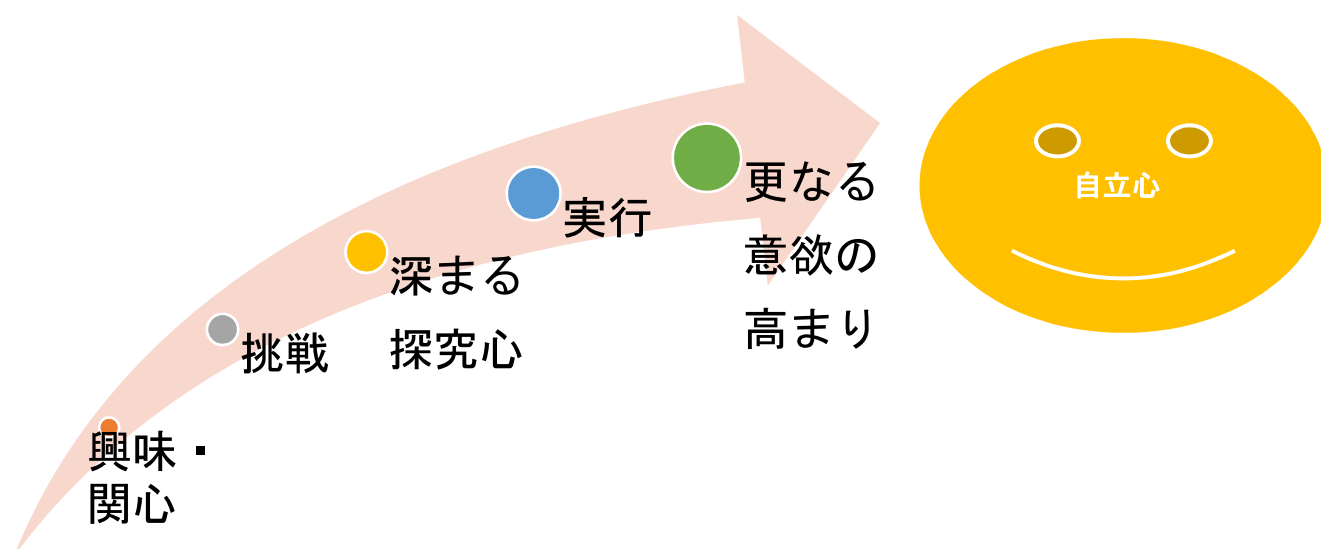
V まとめ

実践を通して科学する心とは・・・

5歳児の実践を通して、恐竜が好きな数人の男児達が、図鑑や映像の世界でしか見られない恐竜を、自分達で『本物と同じ大きさで作りたい!』という思いから始まった恐竜の活動。“大好きな恐竜ってどれだけ大きいんだろう?” “手はどんな形かな?” “体の色は?” “恐竜の皮膚ってどうなっているっけ?” 作っていく過程で、より関心を深めていき、友達と話し合いながら形にしていくなかで楽しさ、面白さを感じていた。そして、その生き生きした姿に刺激を受け、少しずつ仲間が加わっていく。そこから、恐竜という一つの分野から、それぞれの関心ごとが枝分かれし、より活動の広がりを見ることができた。乳児期から好きだった恐竜を5歳児になっても、その気持ちは変わらず、今まで以上に、好きな思いの深まりが見られた。

このどんどんやってみたいこと（興味）を友達同士でアイデアを出し合いながら（対話）目的に向かって、実現させていく過程に科学する心は育まれていくことが分かった。そして、様々な素材と向き合い、自分自身で経験したからこそ、その素材の特徴を見つけ、次の目標の実現に向けてやってみよう! の意欲を高めて自分達で考えながら取り組む姿が見られている。そして、新たな関心事に向けて、自分達の手で工夫しながら! 試行錯誤しながら! 前に進んでいく。

このことも科学する心が育まれていく上で大切なことだと学んだ。



どれくらい
ちかづけたら
はっきりみえるかな?

2020 科学する心

あれ?
なんで? さかさまに
うつっちゃうの?



新たな気づきと不思議がおもしろい!

深く探求すればするほど「どうすれば?」「なんでかな?」が溢れる!

おわりに —今後の課題と取り組み—

子ども達の『今』興味を持っていることをどう広げていくか？

- ・「やってみたい」をすぐに実現できる材料、素材、じっくり取り組めるコーナー、友達同士で対話ができる場所の環境の工夫。
- ・子どもの気づきや思いに寄り添い、一緒に楽しんでいくこと、共に学んでいくこと。
- ・子ども達が目的に向かって自分達で取り組んでいるときには、一歩引いて子ども達の力を見守ること。

これまでの実践を積み重ね、子ども達の力を引き出す上で、以上の事柄が保育者の関わりとして、とても大切だと改めて学ばされた。

また一言で「恐竜が好き！」と言っても、一人一人が興味を持つ視点が違っていた。それぞれの『好き』な分野や知りたい探究心が深まっていく過程で、どんどん大人では予想つかない展開になっていく。それくらい子ども達の発想は豊かだ！その予測不可能で、どんな展開になっても、その子ども達の発想や思いを前向きに受け止め、柔軟に対応していく力が求められていたように感じる。

今年度は新型コロナウイルス感染の感染拡大予防の為、今までなら、こんなに恐竜に興味があるのなら「博物館に行ってみよう！」と実際に足を運び、本物の恐竜の骨の化石を目の前で見てみたりする経験ができたのだが、実現は難しかった。でも、そんなことで子ども達の関心や意欲は終わらせたくない！それなら、園で映像を見てみよう！たくさん図鑑で調べてみよう！今だからこそ出来ることをとことんやろう！と出来る最大限のことを子ども達と取り組めたような気がする。そしてそれぞれのご家庭でも、一緒に作り出す過程を楽しんでもらえていたので、完成した博物館に入った時の保護者の皆さんの驚きと嬉しそうな表情。その表情を見る更に嬉しそうな子ども達の表情が忘れられない。子ども達が目を輝かせて作り出してきた世界はとても創造的で魅力的なのだと感じた。そしてその探究心は止まることなく、今度は『映画館作り』へと動き出した。また、どんな発想で試行錯誤していくのかとてもワクワクしている。

今年度は、園内研修でもそれぞれの歳児で、子ども達の興味に寄り添い、そのエピソードを職員間で共有でき始めている。来年度は、園内でたくさんエピソードを出し合いながら、様々な歳児での科学する心が育まれる実践がまとめていけたらと考えている。

執筆者

渡邊正江

